北名古屋市の未来を考える

第６回

2027年に予定されているリニア中央新幹線の開業が北名古屋市にどのような影響を与えるのか、それに向けてどのようなまちづくりをしていくべきなのか、４人の有識者のお考えを伺いました。市民のみなさんに北名古屋市の将来を考えていただく参考として、その概要をお伝えします。

阿部 和俊氏

（愛知教育大学名誉教授）

【略歴】愛知教育大学助手、助教授を経て教授を務め、退職後も広域計画策定などに寄与してきた。「経済的中枢管理機能からみた日本の都市体系」など、都市規模と都市機能の分析などを進めてきた。

リニア中央新幹線開業に伴う都市の性格の変化

東海道新幹線が開通した頃、名古屋市は都市機能などが吸い上げられるといわれていた。実際にアメリカ領事館が東京へ引き上げて、ストロー効果の象徴のように取り上げられた。しかし、再びアメリカ領事館は戻ってきた。それは、名古屋の製造業がしっかりしていたからだろう。

名古屋圏は製造業の集積が大きいが、将来も製造業で良いのか疑問はある。運良く繊維産業から自動車産業に代わり、次に航空機産業が期待されているが、北九州市八幡の製鉄産業のように、まちを支えていた産業が抜けたら、行政では対策が打てない。また、行政が新産業を振興しようとしても、多くの場合、上手くいかない。

1980年代には、新幹線のぞみ号の「名古屋とばし」が問題になったが、今は解消された。コンサートなどの開催データを分析すると、東京と大阪のみで開催される例は別として、東京・大阪・福岡というような「名古屋とばし」は、実際にはそれ程多くはない。

東京と名古屋の時間距離が東京とさいたまと同じ位になっても、終電後にタクシーで帰ることはできないため、名古屋が東京の副都心のような位置付けになるとは考えられない。だから東京の出城となるのではなく、独自性を出す努力をしていくべきである。

北名古屋市がリニア中央新幹線開業の効果を生かすための取組

名古屋駅前では賃料が高いので企業が郊外にオフィスを構えるケースも出てくるかもしれないが、北名古屋市はビジネス街ではなく、住宅都市を目指すことが良い方向性であると思う。ライフスタイルから考えても、ここに住んで、都心で働き、アフター5を楽しみ、帰って来るという生活パターンの方が楽しい。西春駅前は、集合住宅があって、しゃれていると思われるようなまちづくりが必要である。また、駅名も「西春」から「北名古屋」に変えるほうが知名度を上げるためには良いと思う。

子どもの教育環境を充実し、たとえば中高一貫教育の実施や、高等学校、私立中学校を誘致する選択肢もある。名古屋や江南に通学もできるが、インテリジェントな人は子どもの教育に熱心であり、近くに良い学校があるところに住みたがる。

名古屋市民が周辺地域の公園や、保育サービスに魅力を感じているという声もある。ここにしかない環境を整えて、定住人口を引き付ける必要がある。また、この地域に育った人が戻って来ることが必要である。例えば、２人の子どもが他の地域に出て行ったとしても、そのうちの１人は戻ってくるというイメージである。

丘陵部では、車を運転することができなくなると生活に困るが、北名古屋市は平たん部であり、その意味で住む場所としては有利である。

名古屋圏域としての視点

名古屋市は拡大した方が良いという意見と、今のままで良いという意見があるが、名古屋が頑張ることが日本のためには良い。名古屋市が大きくなれば北名古屋市に期待する可能性が出てくるが、逆に縮むのであれば北名古屋市のことは構っていられないであろう。

問合せ　総務課